

Eva Plach, The Clash of Moral Nations:
Cultural Politics in Pilsudski's Poland,
1926-1935

| | |
|-----|--|
| 著者 | 仲津 由希子 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジア経済 |
| 巻 | 48 |
| 号 | 7 |
| ページ | 94-100 |
| 発行年 | 2007-07 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00007344 |

Eva Plach,

*The Clash of Moral Nations :
Cultural Politics in Piłsudski's
Poland, 1926–1935*

Athens : Ohio University Press, 2006, xiv + 262pp.

なか っ ゆ き こ
仲 津 由 希 子

I

大半が第1次大戦後に独立した東欧諸国の歴史学研究全般の今日の位相という、第1には1989年体制転換後の史料公開を受け、浩瀚な資料に基づいた実証分析が可能になって久しいこと、第2に、「国民国家」史や、それに続く「国民国家」の相対化という「大きな物語」が力を失った後、研究者の関心が多様化し、研究領域が拡散したこと等が指摘できよう。しかしそうしたなかでも、常に高い関心が寄せられる研究対象は存在する。1926年5月政変によって誕生したピウスツキ政権をいかに評価するか、という本書のテーマは、まさにその一例である。

本書の著者 Eva Plach は、ローリエ・ウィルフリード大学（カナダ）歴史学助教授である。ポーランド女性史に関する論文が数点ある他、18世紀以降のポーランド人歴史家を紹介したアンソロジーではポーランド語論文の英訳者のひとりとして登場している [Wróbel et al. 2006, 165–179]。現在30代後半の、将来が囑望されている若手研究者である。

II

本書の章立ては以下のとおりである。

- 序 論 共和国を震撼させた3日間 1926年5月12–15日
- 第1章 戦後ポーランドの精神的恐慌
- 第2章 ポーランド中がピウスツキに宛てて書き

送る

- 第3章 道徳行状団を立ちあげて
- 第4章 サナツィア時代の女性の積極行動主義
- 第5章 サナツィア国家におけるプレイボーイ
- 第6章 奇跡の春を評価する

序論では本書の問題意識が語られる。著者によれば、従来のピウスツキ体制研究の視角はあまりに「政治的文脈に限られてきた」(p.6)。ここでいう政治的文脈とは、主として、(1) 5月政変の計画性の有無を争い、(2) 同政変を民主主義への懐疑の表出として解釈し、(3) その統一綱領の不在を批判してきた先行研究である。著者の理解するところでは、ピウスツキ政権は、単なる政治的事件以上の何かであった。5月政変には、実行者の管理下でない勢力や理念の解放が伴った。また統一綱領が不在だったからこそ人びとは様々な可能性を思い描きえた。ピウスツキ体制のこうした側面にこそ注目したい、と著者は述べる。

その際、特に注目するのは、サナツィアという標語である。刷新という意味をもつ、ラテン語出自のこの言葉は、政変直後から同政権が盛んに唱えたものであった。それ故、ピウスツキ政権はサナツィア政権とも呼ばれる。が、この標語は、先行研究が扱ってきたような、政治的・軍事的文脈においてのみ厳密に用いられたのではない。当時のポーランドでは、性道徳や女性の社会的役割も含めて様々な場所で「純化、健全、再生」が叫ばれた。この観念は、一部の人間だけが標榜するものではなかった。それはより広範囲の人びとが、この言葉をめぐって激論を闘わせる、ある種の公開フォーラムをつくりだす力をもった言葉であったのである (p.16)。なぜサナツィアは、このような力をもったのか。シンボルとしてのサナツィアの具体的諸相を理解すること、これが本書の課題として設定される。

続く本論で、このシンボルとしてのサナツィアが多角的に史料で補足されていくのだが、この公開フォーラム＝サナツィアが何であったのかについての著者の結論は、序論の段階で先取されている。それはナショナリスト右派と左派の闘いであり、「もっ

とも本質的なレベルでは、闘争は、女性らしさのモデル、ネイションの定義から始まって市民行動主義と国家への奉仕という理念まで、『誰が』あらゆる諸定義を定め、究極的には管理するかをめぐるものであった。闘いはポーランドらしさとポーランドの象徴と定義をめぐるもの」だったのだと (p.8)。なお右派、左派とは、それぞれ国民民主党やキリスト教民主党等とピウスツキ派を指す。日本の研究者は、右派、左派概念の茫漠さを問題にし、政党名で論述するのが一般的である。が、本書はむしろ保守や革新といった思想的傾向の緩やかな分類を意図していると判断して、本稿では暫定的に右派、左派という原著の表現を用いていく。

第1章は、第1次大戦直後から5月政変までの新聞雑誌記事から、当時のポーランドを覆っていた「言説上の道徳パニック障害」を描写する。フェミニズム研究の成果によれば、混沌の時代には、性差の自然な役割秩序と一般的な社会秩序とを結びつけて語る傾向がある (p.19)。当時のポーランドでも、この傾向が右派の論説に観察できた。第1次大戦前、女性は家を守り、男性を闘いに送りだし、そして迎え入れる存在であった。女性は愛国精神とポーランドらしさの貯蔵庫であり母体であった。対して、第1次大戦後の女性の間では個人主義が蔓延し、母としての義務、祖国に対する義務の感覚が解体してしまった。飲酒癖、乱れた服装、「ポルノグラフィ」。戦後のポーランド公共生活の頹廃は、こうした女性の道徳的墮落と不可分に結びついている。彼女らの再生は公共生活の基礎の再確立と同義である。このようにジェンダーや道徳の問題と国政や公共のそれとを結びつけて論じるのが、右派の議論の典型であった。

著者は続いて、こう論じる。ポーランドの危機を訴え、道徳的再生の必要性を煽る言説が過度に社会を支配していたために、人びとは、再生や刷新という言葉、またそれについて思考することに慣らされていた。ピウスツキのクーデターは、これを資本として利用することができた。ピウスツキは、ポーランドをより完全に再生させるための刷新の旗手として迎えられた。そして政変は再生にむけた最初の一

歩として認識された。政変後は、誰もが再生を宣揚する「国民の祭典」とでもいうべき事態が招来したのだと。

そして、当初、道徳的再生を盛んに唱えた右派は、対立していたピウスツキ派が道徳的再生を旗印に政権を確立したという事態に直面して、新たな言論戦略の創出を余儀なくされた。それが、再生は必要だが、ピウスツキ派には不可能だという論理である。右派は、ピウスツキ派をフリーメーソン、ユダヤ人、左派リベラル、世俗主義、進歩主義の雑居体として断罪した。ピウスツキ派を、ポーランド文化＝カトリック＋西欧文明を裏切る存在として訴えた。こうして今度は、政治的事件や体制が、文化領域の言説と結びついて語られる状況が生まれた。このように1926年5月政変は、ピウスツキ派が予期、管理しえないような多様な言説空間をもっていたと小括されて、第1章は締めくくられる。

第2章は、全国からのピウスツキ宛書簡と、書簡の管理を任された一秘書の回想録を一次史料にして、サナツィアの機能に迫る章である。政変後、ピウスツキは、自分の政策に対する人びとの反応をみる目的で、一種の「目安箱」制度を新設した。このようにピウスツキが民主主義の原則を廃止しながらも公共討論を制約しなかった点、そして同制度が人びとに政治的行動主義を促す制度として機能した点を、著者は指摘する。執筆者の大半は社会的アウトサイダーで、この最高国家責任者宛書簡によって政治参加を始めることになった。それ故、サナツィアはある種の「市民概念の変化」をもたらしたと著者は説明する。

とはいえ、引用される書簡内容は実に多彩である。自己の不遇と経済的困窮を訴えるもの、離婚したために子供が洗礼を受けられない苦境を訴えるもの（多くはピウスツキが代理夫を務めた）、ピウスツキが反体制派の多くを投獄した1928年のブジェシチ選挙の際に、その愚行を叱りつつも、ポーランド人は貴方の味方だとエールを送ったもの、ピウスツキに「おじいちゃん」と親しげに呼びかける子供の書簡も含まれる。こうした多彩な書簡史料から、著者は、当時の人びとが彼を「自分勝手にない、生粋の

ポーランド人の男らしさ」をもった「ニーチェ的な超人の理想の体現者」として理解していたことを指摘する。そして章末で、「自分勝手であることを止めてポーランドのために働こうというメッセージ」を発した、ヨーロッパの他の独裁者とは異なる類型の人間であったことを強調する (p. 71, 74)。

第3, 4章は、5月政変に鼓舞されて組織された団体を取りあげる。まず第3章では、1926~32年に活動した道徳再生委員会(後にアブラモフスキ記念道徳再生協会)が検討される。資料的基盤は、同委員会の議事録ともっとも活動的だったA・サモティホヴァという女性の著作におかれている。同委員会は、ポーランド人の病癖として倫理的義務感覚や集合的文化の感覚の欠落を指摘した。そしてポーランド人には道徳革命が必要であると訴えた。道徳革命とは集合行為や市民活動に従事できる新しい人間に生まれかわることである。当時、この道徳革命という発想はある種のブームとなっていた。また大衆政党よりも無党派の小さな社会諸組織の方が好まれた。「修道院に引きこもった人びとを引っ張りだして市民として育てるチャンス」とみなされた5月政変後 (p. 85)、多くの市民団体が誕生した。

委員会は、人びとが国政への参加に満足感を得られるようにすることを目標とした。具体的活動内容としては、公聴会の開催や、礼節向上の啓蒙活動、宗教的寛容に関する公論の形成等が提案された。著者は特にジェンダーに関する記載に焦点をあて、右派とは異なる、ピウスツキ派的な政治・文化・道徳の関係像を、同委員会の議事録から抽出しようとする。彼等がパートランド・ラッセルの影響下に離婚の権利、避妊、婚前交渉等について討議を重ねた史実や、教会を独裁者として嫌った言説を紹介するのである。

しかし会合の数の多さの割には会員数も増加せず、成果も出せなかったと著者は結論する。当初はピウスツキ派中枢の政治家の参加もあったが、彼等は多忙故に活動から遠のき、主要メンバーもブジェシチ事件を前にして理念と現実の狭間で態度を決定できず、解散を余儀なくされた。著者は、当事者の言説を引用しながら、知識人が主導的に行う「上からの」

改革プロジェクトという性格が強かった点や、卑近に達成できる具体的な目標を設定しなかったために、末端会員の活動離れが生じた点を、問題点として示唆する。さらに基本的に農村社会で、厳しい社会経済的問題を抱えていた当時のポーランドでは、委員会が成果を得ることは不可能であったと強調する。しかし本委員会は、サナツィアが市民権や政治の意味、言説上の公共空間を拡大したことを示す好例なのだと最後に述べるのである。

第4章は、ポーランド首相も務めたJ・モラチェフスキの夫人Z・モラチェフスカと、彼女が中核を担った女性民主選挙委員会(1928年選挙に向けて設立されたピウスツキ支援団体)を扱う。5月政変をきっかけに政治活動を開始した女性たちは、ジェンダーと結びついた独特の道徳革命観念を抱いていた。彼女たちの自己認識では、女性は、唯一、自分勝手さやエゴイズム、怠惰や無謀さをポーランド人の精神から除去できる性である。故に女性こそがポーランドの未来を建設するサナツィア事業を担わなければならない。こうして5月政変は新しいポーランド的な女性らしさの像を誕生させたのである。モラチェフスカからは、サナツィア概念に女性の健康と福祉の充実を含めるべきだと主張した。

ジェンダーと政治を関連づけるレトリックは1928年選挙時に典型的に表出される。同選挙が、5月政変とその後の体制の道徳的正当性の有無を民意が診断するという独特の性格を有していたためであった。女性民主選挙委員会が用いた宣伝文句をみると、道徳、ジェンダー、市民、政治といったタームが複雑に組みあわさっている。彼女たちはピウスツキが1918年に女性の政治的平等・参政権を最初に認めたことを引きあいに出して、サナツィア政権こそが女性の完全な市民権を保障すると訴えた。サナツィアへの参加は、祖国への奉仕であり、同時に女性の完全な市民化を促すものと主張した。対する右派女性団体も実は同様の修辞法を用いていた。彼女らは逆に、ポリシェヴィキ、ユダヤ人、フリーメーソンの手先であるピウスツキ派が当選すれば、不道徳が助長され、ポーランドらしさが危機に晒され、民族没落に繋がると喧伝した。ポーランドの母はこの事態

からポーランドを救わねばならないと。つまり両者ともに女性らしさには特別な役割があり、女性の方が道徳的内面性に優れているという認識をもっていった点では共通していたのである。

選挙委員会が、倫理政治体を追究する時間があつたエリート女性の団体で、ポーランドの一般女性からは乖離していたという指摘以外の第4章の結論は第3章とほぼ同様である。

第5章は、T・ジェレンスキを軸に、いかに「文化的言説にサナツィアが共振していたか」を分析する。ジェレンスキは外国文学などの翻訳を多く手がけたことでも有名だが、本章では、自由恋愛や家族計画を唱えた医者として登場している。ロンドンを拠点に活動していた性改革世界連盟のポーランド支部として、慣習改革連盟が1933年に設立されたのも彼の尽力によるものであつた。つまり著者は断っていないが、ここでいう文化とは一義的には性道徳領域の問題を指す。ナショナリズムやカトリックに反対したジェレンスキは、右派によって、不道徳・反ポーランドのシンボルに祭りあげられた。ピウスツキ派が明瞭な政治綱領を発表しなかつたために、右派は、ジェレンスキ批判を通じて、間接的にピウスツキ体制を攻撃したと著者は説明する。それ故、ジェレンスキについての枕詞は性道徳に限られず、ユダヤ人等々の象徴、ポスト5月政変の悪のすべてを体现する存在として憎悪された。右派は、他の権威主義政権では然るべくモラルと規律の向上が図られているのに、ポーランドでは逆を行っているとまで主張した。要するにピウスツキ政権を政治体制以上の何かをもたらした存在と右派はみなしていたのだ。著者はそう結論づけている。

最終章では、本論を踏まえて、ポーランド人の定義を争奪する闘争であつたという5月政変の意義づけが再確認される。サナツィアというスローガンはポーランド社会に革命的インパクトを与えた。その衝撃は、従来の研究のように政治構造や公共領域概念の改編という視点に囚われていると評価できない。この観念は狭い政治的領域でのみ流通したのではなく、文化、ナショナル・アイデンティティ、公私領域の弁別、近代など多事を論議させうる言葉であつ

た。故にサナツィアは文化的側面にも注目して理解する必要がある。さらにこの言葉に注目すると、政治と文化領域の相互作用の様子もみえてくるのだ、と著者は立言する。

III

本書を通読してまず気がつくのは、本文160頁、脚注60頁、文献目録30頁という資料的渉獵の成果を窺わせる構成である。これだけの文献を参照した包括的研究は、ポーランド国内でこそ珍しくなくなつたが、英語圏ではまだ限られる。また管見の限りでは初出と思われる史料を女性史関連で多く発掘しているだけでなく、それらを当時の代表的な史料と関連づけて論じている。本書の資料的価値は極めて高いといえよう。

しかし学術研究としては、現時点では疑義がない訳ではない。第1に、著者は適切な先行研究批判の上で、本書の意義づけを示せていないと思われる点である。おおそ本書は、(1) 先行研究が国家構造等、政治領域に分析を集中させた点や(p.159)、(2) 東欧の歴史家がソヴィエト陣営下にあつて不自由だつた点(p.20)を批判した上で、5月政変が単なる政治的事件以上の、ピウスツキ派と右派の間でポーランド人の定義を争奪する闘争であつたという結論を導いていると考えられよう。だが、この結論にみられる研究視角は1970,80年代以降、現地史学に既出である。主流派とまではいえないが、今日ではある程度の市民権を得ている [Wierzbicki 1978; Chojnowski 1986等]。かつこれらの現地研究は、政治領域に照準をあわせたからこそ、体制の客観的評価を外在的・学術的に争うことができた。一方、本書は、基本的に、ある地域や「文化」において生活する人びとにとっての体制を内面的に理解しようと努めた成果と思われる。それ故、本書の先行研究に相当するのは、社会史研究や現地研究者がステレオタイプ研究と呼ぶ一連の業績の方ではなかつたと感じた [Żarnowski 2003; Maj 1991等]。

ジェンダーの視座を強調しつつ、政治史を本書の先行研究と目論んだのなら、時空間ごとに異なる男

女の社会的役割の定義をそれぞれ明らかにし、その定義がある時代や地域の体制を特徴づけていたと主張するのがより適切ではなかったか。著者は、ポーランド女性の自己認識の論理を徹底的に抽出したが、一方で、男性が主義にかかわりなく、女性を政治参加に不向きな性として認識していたことしか史料的に裏付けていない。したがって女性の自己意識を離れたときの両者の関係は、支配や差別、抑圧といった従来の社会的な二元的対立で捉えられている。また著者の叙述はナチス・ドイツを事例に市民ナショナリズムと「男性らしさ」との関係の研究したモッセ(1996)とかなり重複する。全体主義と権威主義という政治体制の異同、またドイツとポーランドの地域差が本書からはみえてこない。ポーランド特有事情が生みだした、当該社会における女性のプレゼンスの大きさは他書でも強調されている[Porter 2005]。この独特の文脈がピウスツキ体制にいかにより異なる特質を与えたのか。「男性的な」ナチス・ドイツとの比較政治的視点を意識した、ジェンダー論的政治史・地域史研究があり得たのではないか。この場合、例えばモラチェフスカの夫モラチェフスキのようなサナツィア中枢の男性が、妻たち女性の活動をいかに評価していたかといった傍証史料を組みあわせ、人事や議事録を組織論や制度論的に吟味する方法が考えられよう。この作業によって先行研究に対する本書の独自性は漸く明解になるのではないか。

第2に、現状では、(1)各史料とそれに対する著者のコメントから読者が予想する論理展開、(2)各章冒頭、章末のまとめ、(3)著者が提示する本書全体の枠組みが、各々に齟齬をきたしている。著者の叙述の拙さが、地域研究によくみられる方法論的曖昧さとして理解されるものなのかは判らない。だがまず(1)については、例えば個別団体のサナツィア概念の事例分析を主目的としているはずの第3、4章で、女性たちの活動がピウスツキ派中枢とは一切無関係のまま失敗に終わったことやその理由といった歴史的事実が、記述の多くを占めている点があげられる。(2)については、道徳カタルシスが社会の広範囲に訴える力をもちつつも、道徳革命の内容が

未確定であったことを第1章ではみてきた、とする第2章冒頭の概括を例としてあげる。先の紹介の如く、実際の第1章は、右派による女性の道徳的堕落批判と、それが5月政変を部分的に支えたという歴史解釈を中心とする。そしてこの段階で本文内容とずれていようが、サナツィアという標語が従来の史学が考えていた以上の意味をもっていたとするのが第1章小括である。これは道徳革命の内容が未確定だったという話と同義ではないだろう。逆に右派以外への言及が少ない第1章のみを読んだ読者は、この時点では道徳革命の内容を右派のそれとして、かなり固定的に捉えているくらいではないか。さらに(3)の例として、このように各章の関連づけに違和感を覚えつつも、行間から立論の全体像を予測しながら読みすすめていくと、結論部で今度は各章の無関係性が主張される点である。著者は最終章で、本書で取りあげたのは各々「ある特定の視点から」のサナツィア像、「選ばれた事例」に過ぎず、5月政変後をより集中して研究するための基盤たることを狙ったと断っているのである(p.159, 163)。もしこれが本書の意図であるなら、本書の性格を序論の段階で断り、先述した先行研究の整理と問題点の指摘、その理由として史料を提示するのが、然るべき手続きだったのではないだろうか。

第3に、道徳、文化、政治、市民といった本書の立論を支える語彙を分析概念として厳密に定義づけていないため、主張が判然としない。例えばピウスツキ体制は従来の政治の意味を変えたという本書の結論のひとつを取りあげてみよう。従来の政治とは議会政治や政府の政策であろう。5月政変後は市民参加の意味が加わり、公共領域が実質的に拡大したと主張したいのだろう。読み手はこう推測するのではないか。だが第3、4章では、女性団体が大文字の政治と一切の交流をもち得なかったのに、政治の意味を拡大・変化したと強調されている。ここでいう政治の意味の拡大は、実質的な市民の国政参加を意味せず、むしろ各個人の観念上で公私領域等の移動が生じていたことを示唆するのではないか。

この曖昧さを内包したままに、政治と文化の相互関係が指摘されると、議論はさらに錯綜する。文化

概念も多義的であり、例えば人文科学と人類学等でも大きく定義が異なる。ここで著者がいう文化とは何か。著者によれば、サナツィアと文化的言説との共鳴関係をもっとも完璧に観察できるのは第5章である。ここでの分析対象はカトリック・性道徳問題である。これが著者のいう文化だとすると、政治と文化の相互関係は、文化政策の類と推測される。しかし第2～4章では、およそ政治（参加）文化論と解釈される集団的精神や行動の未発達という文化が扱われている。性的・金銭的素行という道徳の問題として政治を語りたがる傾向こそポーランド文化だと敷衍することも可能である。そもそも本書は各種の言説の羅列だけで、各概念の編制のされ方や権力・主体の形成といった分析手続きをとっていない。故に何をもちえて文化と政治相互の実体的関係を明らかにできるというのか、よく判らない。が、いずれにせよ分析対象の異なる各章の統一や位置づけの明確化のためにも、本書では概念整理をより重点化すべきだったと感じる。なお民主主義や権威主義も未定義のまま登場する。民主主義は手続き的なそれか、実質的なそれか。権威主義については、ピウスツキ体制は「1930年代以降、権威主義へと向かった」、ピウスツキが1935年に死亡し、体制は「別の権威主義体制となった」といった解釈に困る文章が散見された（p. 161）。

さらに近代主義的とでもいうのか、経済的困難故に理想的倫理の実現が困難だったとするような、およそ今日では受けいれがたい説明が数カ所みられた点も指摘しておきたい。

最後に第4として、論理展開や語彙レベルに留まらず、調査上でも注意が不足している。一例として、アブラモフスキ（1868～1918）という人物の説明をあげたい（pp. 86-87）。第3章の詳述では、彼が国家のための積極行動主義を唱えたかに読める書き方がされている。だが彼は基本的に無政府主義者であった。労働哲学や国家のための積極行動主義を唱えたのは、彼と同様に大戦間期ポーランドに思想的影響を与えたブジョゾフスキ（1878～1911）の方である。脚注をみると、著者はアブラモフスキの一次文献にあたっていない。サモティホヴァ等の二次文献

に、その理解は依拠している。おそらくサモティホヴァが彼を独自に解釈して国家奉仕思想を導きだしたと推測される。この場合は当然、両者の間の差に留意すべきであろう。また二次文献からアブラモフスキが「近代ポーランド社会学創設の父のひとりとして広く認められている」と解釈したと思われるが、これも誤解である。彼は後継者を得なかったため、ポーランド社会学の父とは位置づけられず、あくまで独自の社会学思想を発展させた先駆的人物として、一般には評価される [Mucha and Winclawski 2006, 332等]。彼に関する記述に特に言及したのは、本書で何度も触れられる道徳革命を唱道したのが彼だったからである。そもそも彼は19～20世紀転換期のポーランドで道徳革命を唱えはじめた。この歴史を然るべく理解していれば、本書の構成は大きく変わったのではないか。

しかし本書の価値は何よりも、これまで注目されなかった史料を多数発掘した点に認められる。冒頭に述べたような関心の拡散時代にあっては、新しい試みのひとつひとつが価値あるものであろう。ピウスツキ体制の解釈に新たなパラダイムの導入を提唱する本書の試み自体は興味深く、他地域の研究でも参考になる発想が多く盛り込まれていると思われる。

また本書は、現代ポーランド政治を理解するための参照文献としても意味をもちえよう。例えば2005年の大統領選挙において、「連帯」系出身のレフ・カチンスキ候補が盛んに「道徳革命」を唱えたことは記憶に新しい。同選挙の対立構図をいち早く報じた小森田秋夫教授は、内外の国家危機に対して「道徳的」な正統性を有する大統領（レフ）の下に有権者の参集を訴えたのだと解説している [小森田 2005, 36]。評者の見解では、「道徳革命」の「道徳」の意味あい、大統領の「道徳的」正統性のみには留まるものではない。そこには「連帯」の夢が潰れて、私領域に撤退してしまった人びとのなかに起きるべき、再度の公共領域への参加という「道徳革命」への期待がある。このように推測するのは、現地の有識者のなかに、大戦間期と体制転換後のポーランド政治社会との類似性を指摘する声があるためである [Śliwa 1993等]。そのような現状認識があればこ

そ、今日の世情や特定の人物に対する批判に、大戦間期ポーランドの政治家や思想家等の言質が援用される現象がまゝ観察されるのではないだろうか。それ故、両時代の社会が同一かは別の学問的検討の余地があるとしても、現地の政治家等の意図や戦略を解説する際に、大戦間期の知識と照合した考察が有意義な場合はあると評者は考えている。この点において、当時の人びとの言説を広く直接拾いあげている本書は、現代政治専攻の研究者にも通読を薦められる一冊だと思ふのである。

文献リスト

<日本語文献>

- 小森田秋夫 2005. 「ポーランド新大統領が掲げる『道徳革命』の狙い——カチンスキ兄弟政権を誕生させた二つの選挙——」『世界週報』86(49) 12月27日.
- モッセ, G・L 1996. 『ナショナリズムとセクシュアリティ——市民道徳とナチズム——』(佐藤卓己・佐藤八寿子訳) 柏書房.

<外国語文献>

- Chojnowski, Andrzej 1986. *Piłsudczycy u władzy: dzieje Bezpartyjnego Bloku Współpracy z Rządem* [政権下のピウスツキ派——政府協賛無党派ブロックの歴史——]. Wrocław: Ossolineum.
- Maj, Ewa 1991. “Stereotypy w kulturze politycznej

społeczeństwa polskiego” [ポーランド社会の政治文化におけるステレオタイプ] In *Tradycje i współczesność kultury politycznej w Polsce(1918–1990)* [ポーランドにおける政治文化の伝統と現代性(1918–1990)]. ed. Edward Olszewski, Lublin: Wydaw. UMCS.

- Mucha, Janusz and Włodzimierz Winławski eds. 2006. *Klasyczna socjologia polska i jej współczesna recepcja* [古典的ポーランド社会学と今日の受容]. Toruń: Wydaw. UMK.
- Porter, Brian A. 2005. “Hetmanka and Mother: Representing the Virgin Mary in Modern Poland.” *Contemporary European History* 14: 151–170.
- Śliwa, Michał 1993. *Polska myśl polityczna w I połowie XX wieku* [20世紀前半におけるポーランド政治思想]. Wrocław: Ossolineum.
- Wierzbicki, Andrzej 1978. *Naród–państwo w polskiej myśli historycznej dwudziestolecia międzywojennego* [大戦間期20年間のポーランド歴史思想における民族と国家]. Wrocław: Ossolineum.
- Wróbel, Piotr et al. eds. 2006. *Nation and History: Polish Historians from the Enlightenment to the Second World War*. Toronto: University of Toronto.
- Żarnowski, Janusz ed. 2003. *Społeczeństwo polskie w XX wieku* [20世紀のポーランド社会]. Warszawa: IH-PAN.

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)